

かもしんない。



作.ねこじたと

臆病な犬ほどよく吠えると言う。
だから僕も鳴く。





孤独とは人間以外の生物やモノとコミュニケーションをとっている時間のことをいうのかもしれない。



人は心の窓を通して思い出を見る。その窓にはきっと、薄いレースのカーテンが掛けられている。だから思い出は不透明に見えるのかもしれない。



優しい雨と言うのはしっとりと降る雨ではなく、激しく降る夕立のことを言うのかもしれない。夏の乾いた時期に植物を潤し、そしてなによりすぐに止むのがわかっているから。



年をとると昔は良かったと思うようになる。嫌だと思ふ今このときも、時
が経つにつれ、いつかは好きになっていくのかもしれない。



もしかすると過去は人の後ろに存在するものではなく、常に目の前にあるものなのかもしれない。なにかのきっかけですぐに目の前に過去が蘇ってくるから。



何かに迷っていて出口が見つからない。そんな時は入り口が出口を兼ねている場合があるのかもしれない。

わだっ

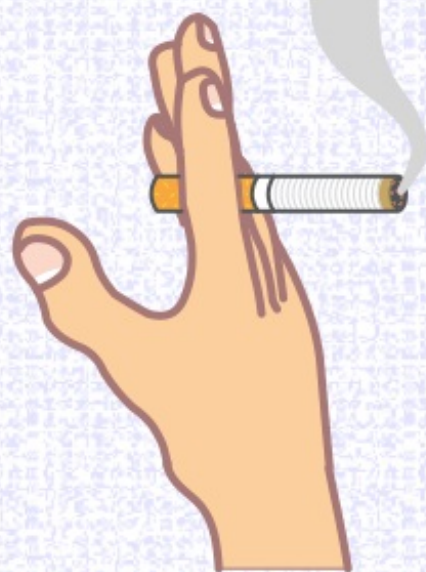


／／
それは何こ
こもわかん

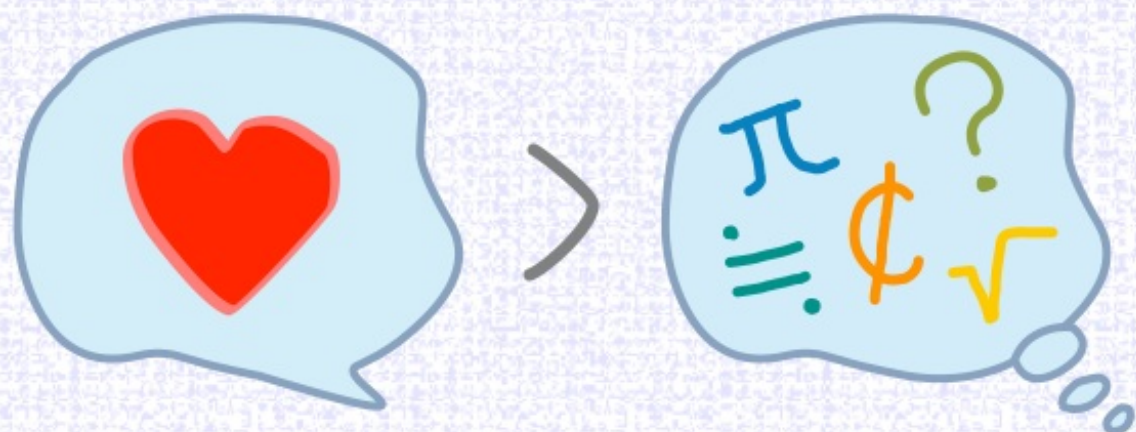
人によっては命より大事だと思えるものが存在するのかもしれない。



喜びは伝えるものではなく、伝わってくるものなのかもしれない。



仕事は急いで処理するよりも、（あわてず）ゆっくり処理した方が早い人間も存在するのかもしれない。



複雑なことを理解するのは難しい。でも、単純なことを行うことのほうがもっと難しいときがあるのかもしれない。なぜ、好きな人に好きと告白するのは難しいのだろう（人によっては）。



幸せは、いつも手を伸ばした指先のほんの少し先にある。それはいくら手を伸ばしても触れることができないのかもしれない。掴んでしまうとそれは幸せではなくなってしまうから。



薄い霧が太陽の姿を浮き彫りにするように、物事をほんの少し不透明にすることで逆に真実が姿を表わすことがあるのかもしれない。



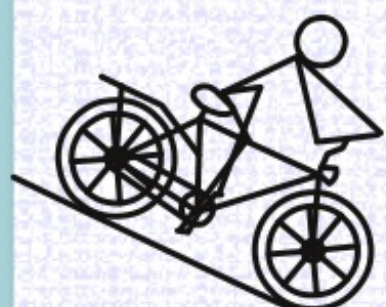
砂時計の砂が全部下に落ちるとひっくり返すように、時が積み重なっていくと価値観がひっくり返って、間違いだと思っていたことが正しかったとわかることがあるのかもしれない。時代は変わるのだから。



転がる石のように人生が転がり落ちていくことは辛い。でも、動きたくても動くことができないほうがもっと辛いときがあるのかもしれない。



視覚を絶つことによって今まで見えなかったものが見えることがあるのかもしれない。



勢いよく下り坂を下ったとき、その勢いで上のほうまで上がっていくことができる場合がある。人生においてもそういうことがあるのかもしれない。



真実はそれを真実だと認める前に、その真実を否定しようとするところから生まれてくることがあるのかもしれない。

人は 生き、絶える

人は、「生き耐える」のでも「息絶える」のでもなく、生き耐えながら息絶えていくのかもしれない。



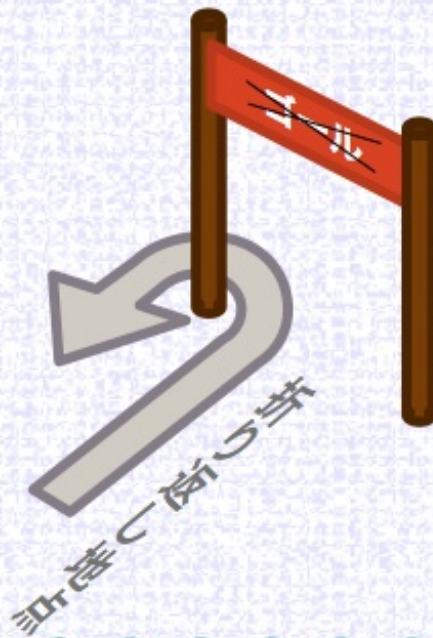
「昨日」は終わった。

もしかしたら「明日」はやって来ないかもしれない。

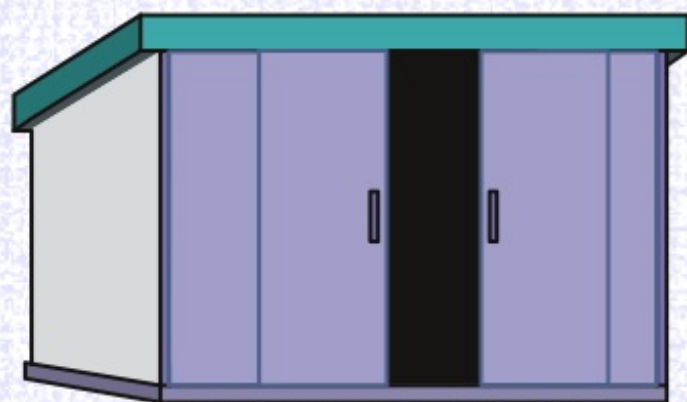
だから「今」を生きよう。（もちろん常識の範囲で）



神は存在する。たぶん。それは、ある人にとっては宗教的な神だったり、ある人はジョン・レノンだったり、ボブ・マーリーだったり、ヘルマン・ヘッセだったり、ピアトリクス・ポターだったり、マーチン・ルーサー・キングだったり、マザー・テレサだったり、ジョージ・ガーシュウィンだったり、チャールズ・チャップリンだったり、ジョー・ディマジオだったり、ヴィンセント・ヴァン・ゴッホだったり、偶然だったり、今の科学では説明できない現象だったり、一枚の絵だったり、1曲の音楽だったり、1冊の本だったり、1本の映画だったり、くだらないロックシンガーだったり、おもしろくないコメディアンだったり、不器用な俳優だったり、かけ算が出来ないカリスマ読者モデルだったり、名もなき人物だったりするのかもしれない。



それを極めた（高い目標を達成した）人達の多くはそこから原点に戻ろうとする。したがって一般的にゴールと思われているところは、本当のゴールの中間地点に過ぎないのかもしれない。



本当に大切なものは、普段はあまり必要性を感じていないものだったりするのかもしれない。

作品「かもしんない。」は昔、賞を
いただいた作品を基に制作しました。



読んでくださり、ありがとうございました。

©ねこじたと (Nekojitatto) All Rights Reserved.

— end —